

論文要旨

W.W. コベットの研究—アマチュアの観点から

西阪多恵子

比較社会文化学専攻 1170118

W.W. コベット (Walter Willson Cobbett, 1847-1937) は、20 世紀初頭にイギリス室内楽を推進したパトロンのアマチュア音楽家として知られている。コベットの主な功績は、〈ファンタジー〉の作曲コンペティションによるイギリス室内楽の創作の促進、及び、『コベット室内楽事典』の編纂とされ、概ね作曲界をはじめプロ中心の音楽界への貢献として評価されている。

しかし、コベット自身及び当時の人々の著述には、そうしたコベット像と異なる面がみられる。コベットは、音楽の博識と経験、成功した実業家としての経済力や社会的地位等の資質によって、プロの音楽界に深く関与しつつも、アマチュアとしての自意識と誇りを持ち、自らヴァイオリン演奏に励みながらアマチュアに益するように、また室内楽の喜びに多くの人々が浴するように、室内楽の普及に努めた音楽家であった。

当時のイギリス音楽界においては、多くの場でアマチュアとプロが混在し、緊張を伴いながらも諸組織や個人間で音楽を共にし、協力しあっていた。その中であってコベットは、特定の組織に専属せず、伝統的な男性のみの組織から近代的な学会、女性音楽家の組織、音楽学校にいたるまで、様々な組織に関わり、組織やその内外の個々人との互いの協力によって活動を続けた。

1905 年、コベットは、短い単一楽章形式としての〈ファンタジー〉を、第一に普通の人々への室内楽の普及のために、そして新しいイギリス室内楽の創作のために、提唱した。その作曲コンペティションは、17 世紀のファンシーに触発された〈ファンタジー〉に似つかわしい歴史のある組織「音楽家組合」が主催し、作曲界の大きな反響を呼んだ。それは主に室内楽の普及に関してではなく、作曲様式に対する反応であったが、コベットは作曲家らの〈ファンタジー〉論を受け入れつつ、室内楽の普及という課題を模索し、表明し続けた。そのようにして〈ファンタジー〉は、プロの音楽界とコベットとの創造的な交流と協力の場となり、プロの音楽界の人々にアマチュアや普通の人々へ視線を向けるよう促した。

コベットはまた、女性音楽家協会との協働により、イギリス室内楽楽譜のフリー・ライブラリーを設立するなど、同協会への寄付を通じて、音楽愛好家やアマチュアを主眼とする室内楽の振興に努めた。プロの男性を中心とする音楽界の背景には、アマチュアと女性との結びつきをはじめ、アマチュアとジェンダーとの複雑な関係がある。その中で、女性音楽家協会は、アマチュアもプロも区別のない女性同士の相互協力により、女性たちのプロフェッショナルな向上をめざしていた。それはまた、プロ音楽界で活躍する女性たちが主導する、男性にも開かれた組織であった。アマチュアの男性コベットと女性音楽家の組織との主にアマチュアのための協働は広く知られ、音楽界の男性プロ中心性の相対化が促され

た。それはアマチュアや女性だけのためではなく、アマチュア、プロ、女性、男性を含む音楽界への視座を高め、音楽界全体に益するものであった。

様々な組織と関わったコベットの晩年、『室内楽事典』の編纂により、国内外の専門家の組織化に取り組むと共に、そこにアマチュアとしての自身の見解を様々に織り込んだ。また、普通の人々に室内楽を広めるという〈ファンタジー〉提唱以来の目的は、戦中戦後の社会変化の中で音楽界にも反映されており、その状況も同事典に映し出されている。『室内楽事典』はコベットの室内楽活動の集大成であった。

コベットは、様々な組織的な事業において、主導性をもちながら周囲と調和し、多様な観点を受け入れ、組織と組織、人と人との間を自在に移動しつつ様々な関係を結んでいった。時にプロに連なり、時に素人への共感を示しながら、コベットは常にアマチュアとして一貫していた。コベットにとってアマチュアとは、第一に、言葉の原義どおり「音楽を愛する者」であり、その可能性はすべての人に開かれている。専門家の知性の下に隠された愛する者としての感性を顕在化し、普通の人々に室内楽を広め、その喜びを伝えることによって、コベットは、普通の人々もアマチュアも、女性も男性もプロも含む、音楽を愛する人々のより包括的な音楽界を志向した。その開かれた姿勢をもってコベットは、アマチュアとして、プロの音楽家らとも相互の理解や共感を深めていった。そして、当時の人々に、コベットの室内楽活動は、プロ音楽界への貢献にとどまらず、そのような音楽に関わる人々全体のためのアマチュアの活動として理解されていた。